

題名	著者	あらすじ・コメント	コメコメ
あんじゅう 三島屋変調百物語 事続	宮部みゆき	【「おそろし」の続編。三島屋の行儀見習い、おちかのもとにやってくる客が話す百物語。 変わり百物語／逃げ水／藪から千本／暗獣／吼える仏／変調百物語事続】 相手が妖怪でも愛おしいものになっていく「暗獣」に泣けたのは野原 (🐱) がいたせい。もう一度犬を飼えるかなあ…。	犬だけでなく動物にすっかり弱くなった。熊の射殺も痛ましくて人間が悪いんじゃないかと思ってしまう。
静人日記	天童 荒太	「悼む人」の続編。静人の旅の日記。著者あとがきに、出版するつもりでなく書き溜めていたものを出版にあたって記録性より物語性がある日記にしたと書いてあった。読むにはその方がいいが、この話が苦手な人にはそういうところがあざとく思えるかも。 悼む旅をしながら静人の理解者も出来、恋っぽい話もあり、「悼む人」の印象よりずっと幸せだったんだと安心した。日記の形でそれほど長い話はないのに、ひとつひとつの小さな話が沁みて来る。その中のひとつ。 浮気性のおじいさんの愛人たちを月曜さんから土曜さんと呼ぶおばあさんがおじいさんを探しているところに出くわす。おじいさんはどうに亡くなっているというのは読みきれたのに、きっと勤労感謝さんの家にいるはずだという痴呆のおばあさんにじんとした。	Sくんの映画を見たら、何気ない街の風景を歌詞にして「心温まる」を狙った歌があったが、あまりにも何気なさ過ぎて耳に入るだけで心に入っていない。静人のような小さな物語を歌えばもっと沁みると思うのよ。
S P 警視庁警備部警護課第四係	金城 一紀	企画。	
弁護側の証人	小泉喜美子	【玉の輿に乗ったストリッパー、ミミイ・ローイこと漣子は上流階級の伏魔殿で孤軍奮闘していた。そんな折、義父が殺される。まさか犯人が愛する夫だったとは！死刑の判決を覆すべく、必至の調査を続ける。新たに弁護側の	帯文句が卑怯。

		<p>証人は見つかるのか？】  あとがきで道尾秀介が絶賛していたので購入した。半世紀ほど前に書かれているので職業や会話などがリアルじゃなく読みにくかった。  どんでん返しをさらりと書いていたので、何気なく読み進めてしまい、改めて戻って確認した。歌野昌午『葉桜の季節に君を想うということ』みたいな呆気にとられた感で終わりました。</p>	
時の 過ぎゆくままに	〃	<p>【優美と毒とを巧みに織りまぜる秀作12編。惜しまれつつ急逝した著者の“忘れがたみ”というべき作品集である】  最初はちゃんと読んだが、4編目辺りからは斜め読み。あとがきに作者のことが書いてあってそれがとても嫌なタイプの人だった。久々のつまらなさ。</p>	著者は生島治郎の最初の奥さん。
太陽ざらい	〃	<p>機知・洒脱・憂愁・戦慄.....海外小説と日本の伝統文芸のエッセンスの配合から生まれた、小泉喜美子の幻想ミステリ。SF的短篇、幻想小説、奇妙な味の物語など、著者の多彩な世界を網羅する傑作短編を12作の収録！</p>	上のと、この本の2冊は図書館で借りた。よかった。
再会	横関 大	<p>【全てはタイムカプセルにとじ込めた—はずだった。誰がうそをついている。幼なじみの四人が校庭に埋めた拳銃は、二十三年の時を経て再び放たれた。時を越えたさらなる真実が目覚ます—第56回江戸川乱歩賞受賞作】  狭い範囲の人間関係で事件が起こって解決している。友達でもある容疑者を探している刑事が唐突に恋人に電話を入れる。その電話で、恋人が容疑者と知り合いでもないのに一緒に遊園地にいたことがわかり逮捕となる。多少の偶然は仕方ないけれど、こんな肝心なところで偶然にしちゃうっていうだけで乱歩賞は信じられない。</p>	刑事ふたりが飛奈（とびな）と南良（なら）。なんでわざわざこんな読みにくい苗字にしたのか不思議。アナグラムになっているとか何か仕掛けがあるのか思えない。

		<p>23年前の犯人を追いつめるところも迫力がなく動機も弱くさっぱりとしすぎで盛り上がらないし、あらゆるところでフォローが足りない。万引きをした息子へのフォロー、暴力をふるっていた恋人へのフォロー、再婚した奥さんへのフォロー。なーんにもない。放置するなら余計な枝葉を書かないでほしかった。</p>	
悪の教典 上下巻	貴志祐介	<p>【学校に放たれた殺人鬼は高いIQと好青年の貌を持っていた。戦慄のサイコホラー】</p> <p>厚い上下巻。深夜一時から下巻を読み始めた。全部読み切らないで寝たら怖い夢を見そうなので朝の4時半過ぎまでかかって読破した。</p> <p>殺戮を繰り返す教師は『バトルロワイヤル』を彷彿とさせるけれど、たけしの泥臭さとは違いこの主人公の教師は知的で都会的な青年。生徒からはハスミンというあだ名で呼ばれている人気者。その落差が余計に狂気を引き立たせる。「黒い家」では似たような殺人事件が起きて話題になったが、この本のようなことは絶対に現実にはいけません。</p>	<p>主人公の悪に對抗する中心で活躍していくと思っていた生徒がいちばん最初に殺されちゃってびっくり。</p>
暁のひかり	藤沢周平	<p>【「暁のひかり」「馬五郎焼身」「おふく」「穴熊」「冬の潮」の五編を収録】</p>	
麦屋町昼下がり	〃	<p>【架空の小藩を舞台に繰り広げられる武家もの四編を収録。「麦屋町昼下がり」「山姥橋夜五ツ」「三ノ丸広場下城どき」「榎屋敷宵の春月】</p> <p>ハッピーエンドが好きなので、話の先に見え隠れする不幸にはらはらしてしまう。賢太郎が笑いは「緊張と弛緩」と言っていたが、この本も同じ。</p>	<p>最近になってやっと藤原周平の面白さがわかってきた。</p>

十角館の殺人	綾辻行人	【四重殺人の起きた孤島に大学ミステリ研究会の7人が訪れる。島に建つ奇妙な建物「十角館」で彼らを待ち受けていた連続殺人の罠。生きて残るのは誰か？犯人は誰なのか？綾辻行人のデビュー作品】	再読。忘れるということはすごい。本格推理小説を再読しても楽しめる。前向きな衰えのススメ。
天使の屍	貫井徳郎	【中学二年の息子がマンションから飛び降り自殺を遂げた。動機を見出せなかった父親は同級生たちに話を聞き始めるが…。《子供の論理》を身にまとい、決して本心を明かさないう子供たち。そして、さらに同級生が一人、また一人とビルから身を投げた】	再読。
夏の約束	藤野千夜	【ゲイのカップルを中心とした若者たちの日常を温かい視点で淡々と描く。孤独と欠落感に縁取られた登場人物たちの内面が読む者の心にしみる注目作。表題と「主婦と交番」の中編2作】 この本が芥川賞だとは知らなかった。社会的に「弱い」立場の人たちがキャンプに行く約束をするというなんてことのない話。性転換した美容師より体重95キロの男が手をつないで歩くゲイのカップルの開き直りの強さがすごい。異端と自覚している人たちが偏見を受け入れたり、無視したりしながら小さくまとまって楽しくやってる。楽しけりゃいいじゃないと、さして盛り上がりもないATGの映画っぽい。こういう“優しい”話は飽きる。 「主婦と交番」は題名からしていやな予感があったがそのとおりの意味不明さだった。この作品を芥川賞にすることを差別的な発言で反対した石原都知事は嫌いだけど「退屈だった」という点は同じ。	男二人ずつの友達が集まってキャンプに行く話がラーメンズのコントにもあるけれど、もっとずっと遙かに面白いです。